大磯町立大磯小学校

研究テーマ：児童一人ひとりの主体的・対話的で深い学びを目指して
～「大磯学」から始める教育デザインの構築～

１、実践の目的

本校は、これまでの学校研究において、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善を進めてきた。

令和３年度は、「心を揺さぶられる“地域の材”を探求しながら自己を実現していく」生活科や総合的な学習の時間の授業デザインについて学び、教師の視点、子どもの視点、子どもの興味関心、発達段階を踏まえて「ひと・もの・こと」から材を得る大切さを知った。

そして今年度は、地域の材を生かす授業を通して、子どもたちが主体的に取り組み、自分たちの住む町に対する思いを深めることができるよう、生活科・総合的な学習の時間の授業づくりの実践を行った。

２、実践の内容

（１）年間計画

４月　研究の概要についての説明
５月　第１回校内授業研究会・講演会
　横浜創英大学子ども教育学部
　大内美智子　教授
10月　第２回校内授業研究会
　横浜創英大学子ども教育学部
　大内美智子　教授
１月　講師による授業参観
　玉川大学教育学部
　湯藤定宗　教授
２月　講師による授業参観
　玉川大学教育学部
　湯藤定宗　教授
２月　学びづくり講演会
　ヒミツキチ森学園
　青山雄太　先生

（２）研究の主な内容

昨年度の課題として、生活科や総合的な学習の時間で育てたい資質・能力がはっきりせず目指すべき方向性を見定めにくかったために、単元構想だけではなく授業実践でも具体的に何をしたらよいのかわからなくなってしまったように感じられる場面があった。そこで今年度は、年度当初に育てたい資質・能力について検討し、ゴールの明確化による、適切な見通しと振り返りの実施ができるように共通理解を図った。

校内授業研究会では、横浜創英大学子ども教育学部長の大内美智子先生にご来校いただき、指導・助言をいただいた。地域の材を生かす授業づくりにおいて、材を決定していくときには、子どもにとって身近で、心揺さぶる教材を担任が発想し、教師の思いと子どもの思いをすり合わせて材を決めていくことを学んだ。また、学び合う雰囲気が醸成されている温かな学級集団をつくること、学ぶ価値が高い教材を見つけ、子どもが自ら関わりをもてる単元をつくること、のめり込む姿を実現する授業をつくることが授業改善のために大切だと教えていただいた。具体的に実践事例の映像を見せていた

だきながら、構造的な板書例や思考ツールの活用を分かりやすく解説していただいた。

玉川大学教育学部教授の湯藤定宗先生には、３日間で１年目からベテランの教員まで、さまざまな授業を見ていただいた。それぞれの授業の良いところを中心に改善点も含めて教えていただいた。「主体的・対話的で深い学び」につながる「心理的安全性」が確保される学級づくりや個別最適な学びなど具体的に学ぶことができた。

３、実践の成果

研究テーマ、『児童一人ひとりの主体的・対話的で深い学びを目指して～「大磯学」から始める教育デザインの構築～』にあるように、地域の人材・学習素材を生かしながら、子どもたちが主体的に取り組む授業をつくることができた。PTA を通じて、ボランティアを募集したり、校外学習で海に行って活動したり、子どもたちにとって身近な存在との関わりによって、より主体的に取り組むことにつながった。また、協働学習を生み出す思考ツールを活用することで、対話的な学習につながっている場面も見られた。課題に対して夢中になっている子どもたちは、隣同士、前後同士などで互いに教え合い、協働的に取り組むことになる。これは、他教科の学習にも見られるようになり、改めて生活科や総合的な学習の時間の重要性を実感することができた。

講師による授業参観を通して、教員それぞれの長所や授業づくり、学級経営について知ることができた。学級の様子を客観的に見ることや自分の授業との違いに気付くこともできた。また長所を教えていただいたことで、自信やモチベーションが上がり教員の資質向上につながった。二人の講師の先生方からは、多くの的確な指導や助言、具体的なヒント、あるいは将来を見据えたご示唆をいただくことができた。

４、今後の展開

今後も「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた研究を一層深め、より児童の心が動く授業を作り上げていきたい。

今年度の具体的な課題として、校内全体で授業の検討や協議する機会が少なかったことが挙げられる。次年度は、学年や個人だけで研究するのではなく、他の教員の授業をもっと参観する機会を増やしていきたいと考える。なかなか参観する時間がとれない現状であるが、教員になるべく負担をかけずにすむ方法を検討し、より研究を深めていきたい。

協働学習を生み出す思考ツールを活用した板書など上手くいかないという声も挙がった。その学習の意図、目的に合っているかどうかよく考えて試行錯誤していき、日常の授業から実践していかないと教員にも児童にも浸透していかない。つまり研究授業のための授業ではなく、日常の授業を改善していくことが必要であると考える。

他にも、授業中のほとんどが教員主導の活動になってしまうことや支援を要する児童への対応、また、新任教師の加入や人事異動によって研究したことがなかなか教員に浸透していかない現状も課題である。前年度研究したことを振り返ることや実践したことを共有していくことで「主体的・対話的で深い学び」を実現していきたい。

今年度最後の校内研究として、ヒミツキチ森学園の青山雄太先生から「ビジョニングにつながる今年度の振り返り・リフレクションの共有」の講演をしていただき、次年度につなげていく。